HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	19世紀中葉露清関係の転換と奕山
Author(s)	楊, 曦晨
Citation	日本中央アジア学会報, 16, 42-43
Issue Date	2020-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.16.42
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88515
Type	journal article
File Information	JB016_008yang.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

19世紀中葉露清関係の転換と奕山

楊　曦晨

本報告は、19世紀中葉の露清関係の変容を背景とし、清朝側対外交渉担当者であった奕山に着目し、その経歴や行動を検討した。露清両国が締結した1851年の伊犂通商条約、1858年の瑷琿条約は、露清間の最初の二条約（1689年のネルチンスク条約・1728年のキャフタ条約）で確立された枠組みを変えた。伊犂通商条約、瑷琿条約の交渉過程において、清朝側から見た場合、ロシアとの交渉を担った官員は地方将軍としての奕山である。愛新覚羅奕山（1790年～1878年）は満洲人鑲藍旗の出身であった。1826年に新疆でカシュガル=ホージャ家のジャハーンギールらによる清朝への反乱が発生すると、1827年に奕山は援軍とともに新疆に派遣された。1830年に起こったジャハーンギールの兄ユースフの侵入事件に際して、奕山は再び新疆に派遣されている。1838年に奕山は伊犂将軍の職にあり、屯田制度とアヘン禁煙制度を実施した。1847年に「七人のホージャたち」がカシュガルに侵攻すると、奕山は伊犂参賛大臣から葉爾羌参賛大臣となり、官兵を率いてその侵攻軍との戦いにおいて中心的な役割を果たした。1850年には伊犂将軍に復任し、1851年にロシア側全権コヴァレフスキーと交渉を行い、伊犂通商条約を締結した。1855年には黒龍江将軍に任命され、対ロシア交渉を担当した。1858年に奕山はロシア帝国の東シベリア総督ムラヴィヨフと交渉を行って、瑷琿条約に調印した。奕山個人の経歴や対ロシア交渉の過程について、すでに先行研究からある程度明らかである。しかし、奕山が活動していた時期において、清朝の地方統治と対外交渉が未分化であったことの実態については、これまでの研究は焦点を当ててこなかった。奕山の対ロシア交渉の問題点を具体的に研究することにより、19世紀中葉に清朝の中央、地方将軍の対ロシア交渉のあり方と露清関係の転換との相互関係を明らかにできよう。

本報告は、奕山の活動を新疆、黒龍江それぞれにおける地方統治と対ロシア交渉に分けて、辺境防備、農業生産、通商貿易、条約締結などの諸問題を考察し、奕山が皇帝の命令を遵守しながら地方統治を行う延長線上で、ロシアと交渉を行おうとしたことを明らかにした。奕山は当初、新疆で起きた侵入事件への対応といった軍事行政面で活躍したが、直接対外交渉に携わる機会がなかった。また、伊犂通商条約の締結過程を見ると、清朝中央は表面上交渉

の主導権を握っているかのように見えるが、当時のロシアの貿易体制構築の試みを理解しておらず、また両国間の交渉を中央から離れた場所で行わせたために、その交渉のあり方は地方将軍の行動に依存していた。また黒龍江における奕山は、ロシアのアムール流域進出に対する警備強化を中央に訴えていたが、中央が消極的な反応しか示さなかったため、管轄域内の局地的な問題の処理を通じて交渉を行わざるを得なかった。瑷琿条約の交渉過程で奕山は清朝中央の主張を貫いたが、伊犂通商条約の交渉過程と違い、ロシア側の全権ムラヴィヨフは奕山の主張を受けつけない非妥協的態度をとり続けたため、自己裁量の乏しさとロシアの強硬な態度の板挟みにあっていたといえる。対ロシア交渉は地方将軍の任務の一つであったが、交渉を行った場合に即時的対応ができなかった。今後も清朝における「前近代」的な「外交」の具体的なあり方、つまり対外交渉と国内統治が未分化であったことに起因する交渉のあり方が露清関係の転換に与えた影響の解明を進めていきたい。

（筑波大学大学院人文社会科学研究科）